

ろう児の言語獲得について

－ 乳幼児支援における手話言語獲得の必要性－

武居 渡

(金沢大学 学校教育系)

ろう児の言語獲得について

絶対に避けるべき事態

手話も日本語もしっかりと身につけられない
(セミリンガル)



手話または日本語のどちらかを身につけている。
(モノリンガル)



望ましい状態

手話も日本語もしっかりと身につけている
(バイリンガル)

聞こえない子どもたちの言語獲得支援で考えるべきこと

○ セミリンガルを避けるために

- 子どもが聞こえないということが分かったときに、保護者に手話を含めた様々な教育アプローチがあることを伝え、保護者が選択できる環境を整備する。
 - 新スク後の支援体制の整備
- 選択したアプローチでコミュニケーションや言語獲得が困難な状況になったとき、様々なアプローチを提案できる専門家の存在。
 - 専門家の主義主張ではなく、子ども（家族）中心の支援
 - 「手話の獲得は音声の活用を邪魔しない」
- 様々な手段を使った手話環境の整備
 - ろう学校 放課後デイ オンラインの活用 YouTube
 - 子どもだけでなく保護者に対する手話学習の場の整備も

多くの両親は聞こえない子どもに 手話言語環境を与えられない

○聞こえない子どもの90%は聞こえる両親から生まれる



家庭内で手話環境を提供できない！

手話で育てたい家庭に対する手話支援が必要！

どのように手話環境を提供するか

- ろう学校(ただし地方のろう学校は子どもの数が減少傾向)
- 放課後デイ(成人ろう者のスタッフとの出会い)
- トレーニングを受けたろう者(と通訳者)の家庭訪問支援
→ 行政の支援が求められる

聞こえない子どもたちの言語獲得支援で考えるべきこと

○ モノリンガルにバイリンガルの可能性を託す

- 音声メインの子どもであっても、第二言語として手話を習得する場を作る。
 - 放課後デイサービス 聴覚障害者協会の取り組み
難聴学級や通級指導教室 オンライン指導
- 手話を獲得した子どもも、手話の力を活用した日本語読み書き指導法の開発
 - 手話ビデオの活用とトップダウンのアプローチ

どのようなアプローチをとったとしても最終的には手話と日本語の2つの言語を使いこなすろう児を目指す

学問的に言えば手話言語って何？

手話言語は、音声言語とは異なる文法や語彙体系を有する自然言語である

- **言語学的に** 言語学の枠組みで分析可能
- **心理学的に** 音声言語と同様の過程で獲得
- **失語症から** 音声言語の失語と同様の症状
- **脳研究から** 言語野が活性化

内外の手話獲得研究より

- 前言語

手話諸語が出る前に手話の喃語が10カ月前後に観察される

- 語彙

1歳 手話初語 1歳半 手話2語文、語彙の爆発的増加

- 動詞の語形変化

2歳 屈折動詞を使用開始（過剰般化・誤用あり）

3歳 ほぼ正しく使用されるようになる

- CL

3歳 CLの使用が開始される（過剰般化・誤用あり）

6歳 CLシステムをほぼ獲得

- NMS

2歳 情動的表情の表出（手話の分離不可）

3歳 手話と表情の分離

（文法マーカ―、副詞、情動的意味の付加）

聞こえない子どもの
手話言語の獲得は
聞こえる子の音声言語の獲得と
きわめて類似している。

ろう児が表出した 手話喃語と手話初語

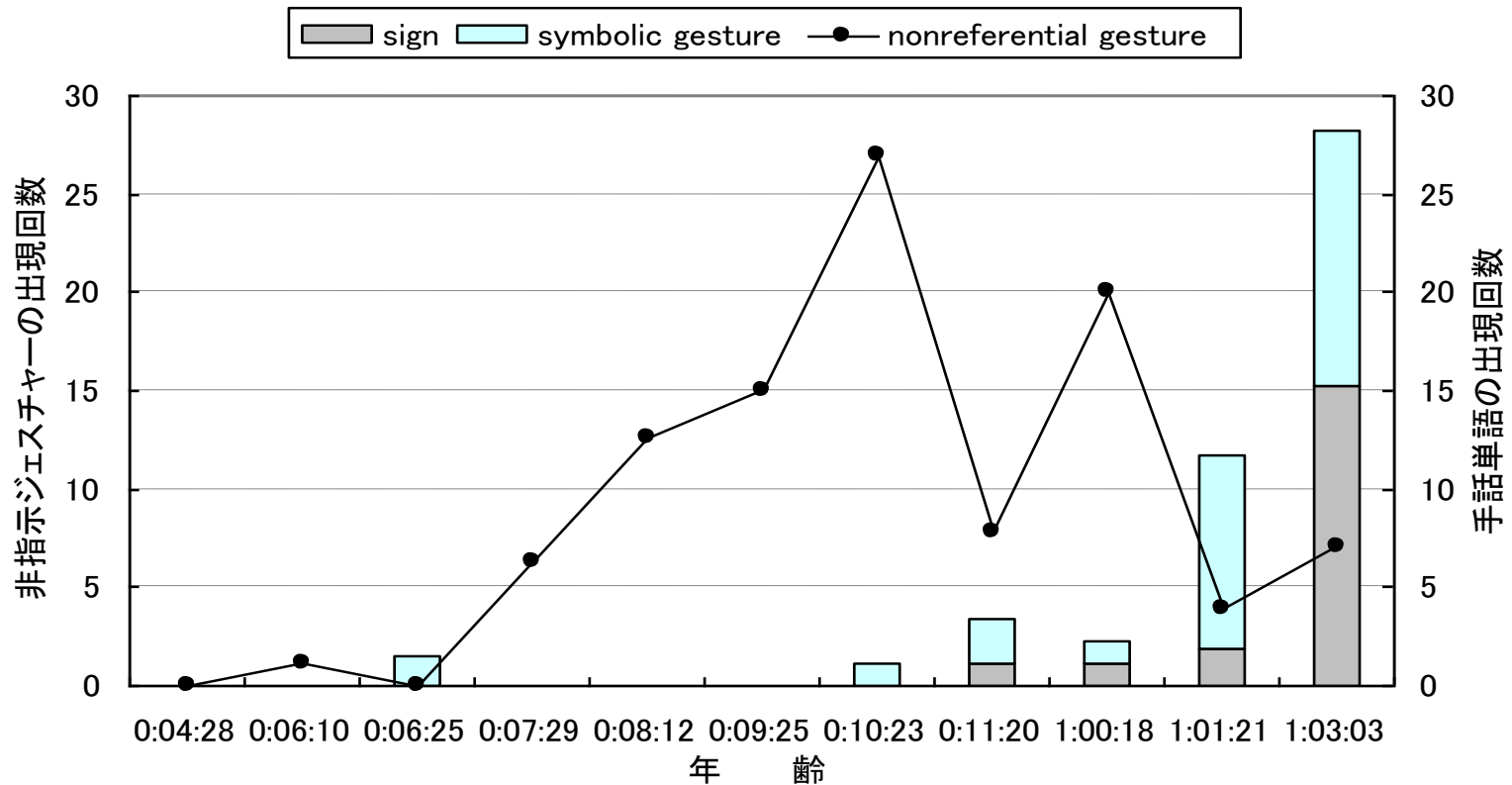


Fig.1 A児(DD児)における非指示ジェスチャーの継時的変化

ろう児が獲得した 手話動詞の語形変化

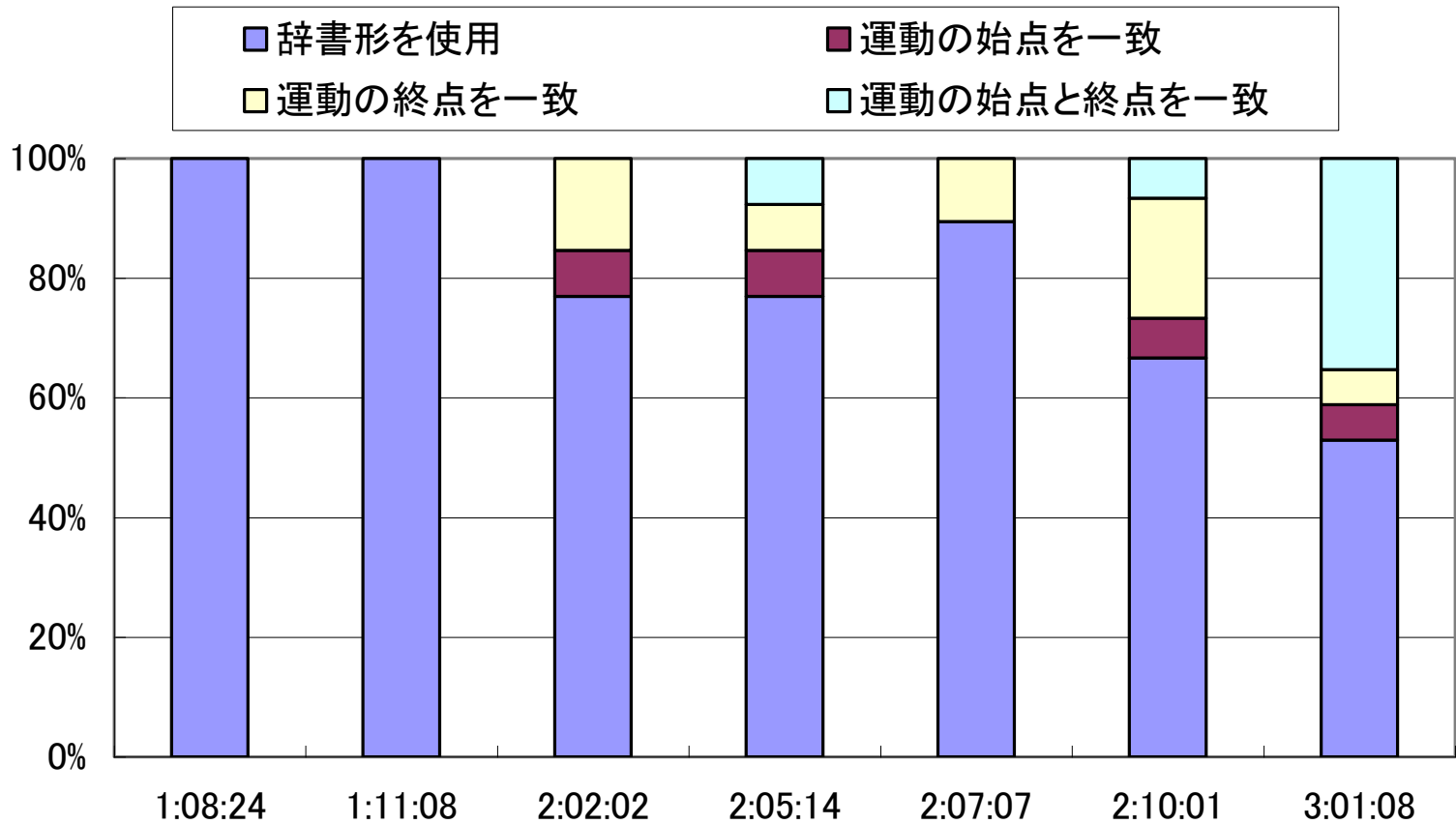
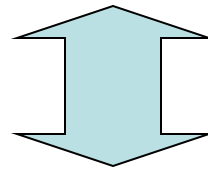


Figure 2 A児が表出した動詞の語形変化についての発達的变化

手話言語獲得と音声言語獲得

聴児の音声言語獲得過程



きわめて類似

聾児の手話言語獲得過程

きこえない子どもたちにとっての 手話の意義

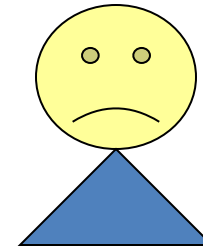
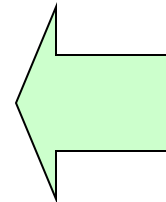
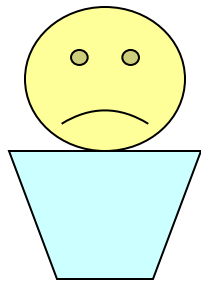
わかるコミュニケーションを可能にする

手話の力を使うことによって
日本語の読み書きの習得を促す

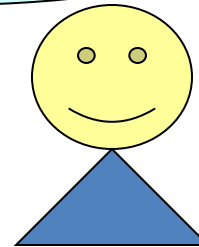
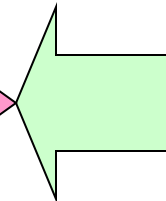
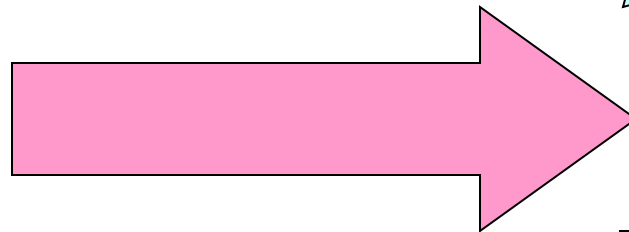
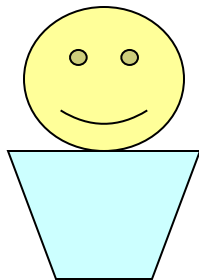
手話が自ら(の障害)を肯定的にとらえ、
聞こえる人と対等にやっていく原動力となる

わかるコミュニケーションを可能にする

コミュニケーションとは



コミュニケーション



子どもへの愛おしさ
コミュニケーションの楽しさ

母親への信頼感
コミュニケーションの楽しさ
わかるということがわかる

コミュニケーション能力？？？

・この子はコミュニケーションの力が弱い

・この子のコミュニケーションの力を育てなければ

・私はこの子の言いたいことを汲み取る力が弱い

・私のコミュニケーションの力を育てなければ

コミュニケーションは個人の能力ではなく2人之间にある



子どもの言いたいことを汲み取り、共感すること
人への信頼 言語獲得のスタート

手話の力を使うことによって
日本語の読み書きの習得を促す

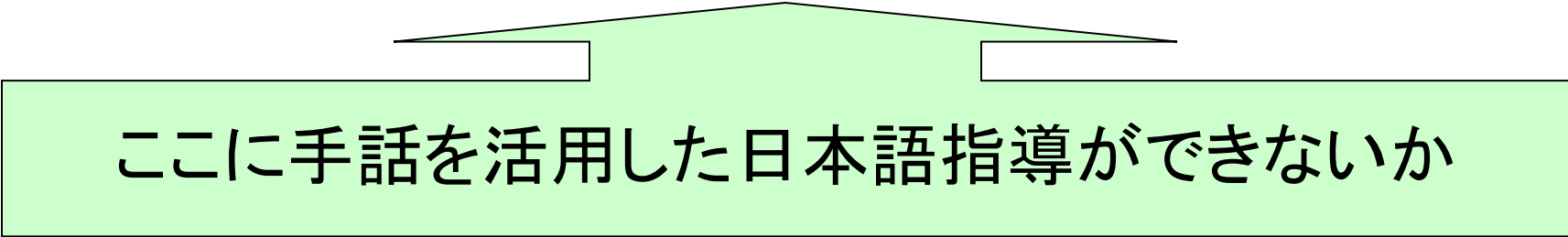
ろう学校での従来の国語指導

- 精読中心

段落に分けて、段落ごとに細かく読む
単語の意味理解に終始してしまうことも



学習者の意欲減退につながる



ここに手話を活用した日本語指導ができないか

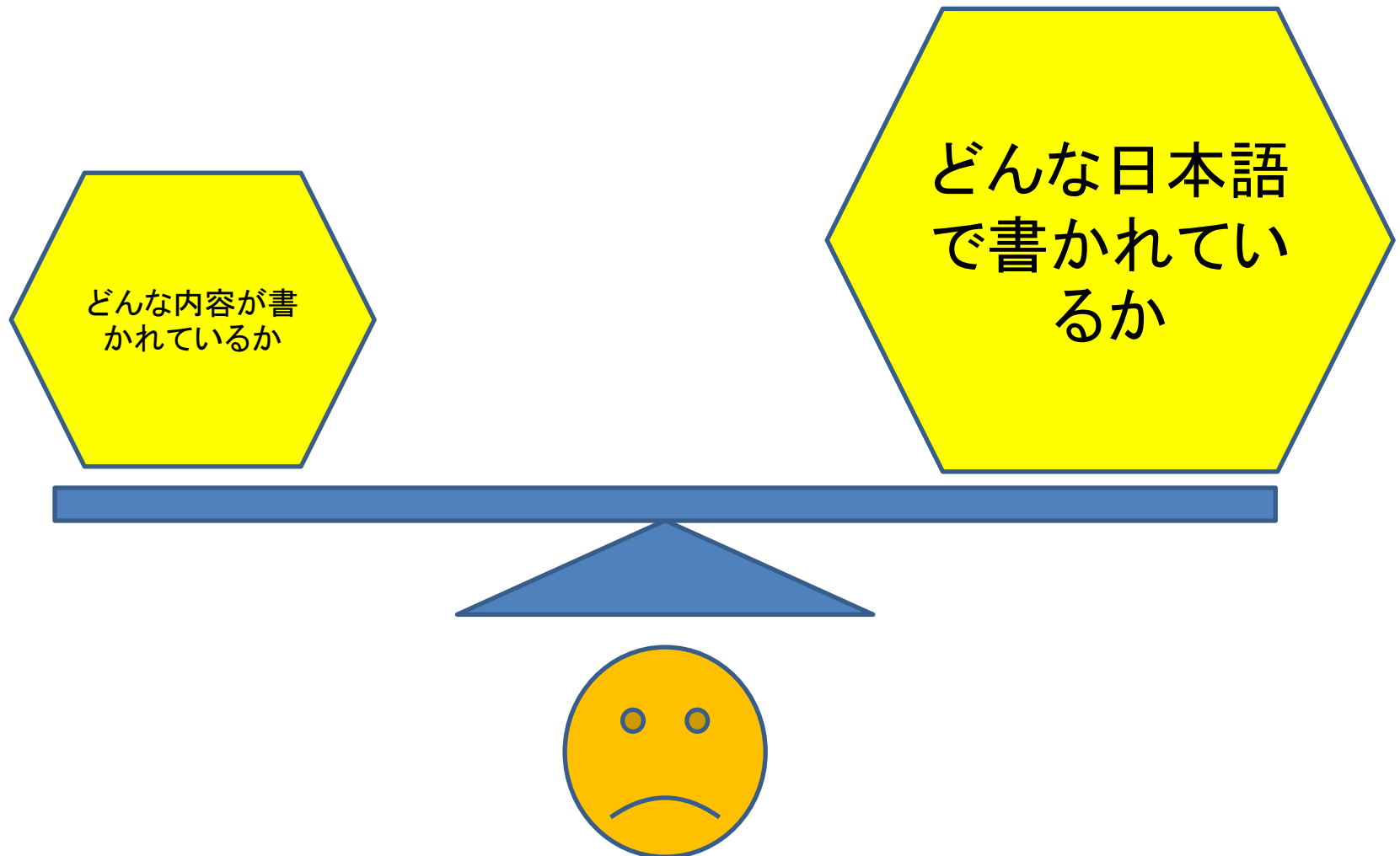
トップダウンの側面に焦点化した 言語指導例

- 手話ビデオを使った国語の授業
- 手話を活用した作文指導

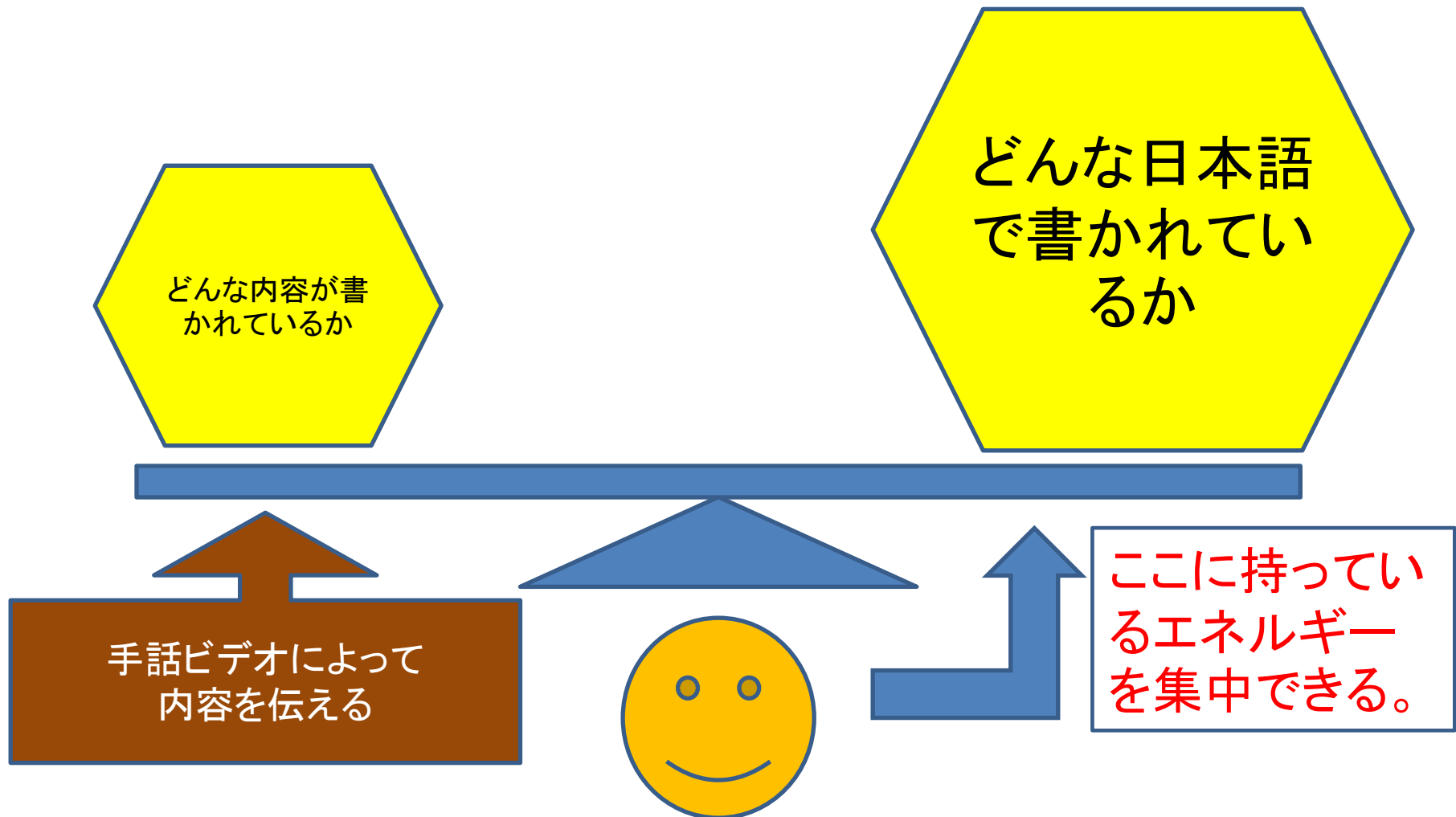
スイミー

手話動画

トップダウンの側面に焦点化した 言語指導例



トップダウンの側面に焦点化した 言語指導例



手話と日本語の関係

手話が第一言語の聞こえない子どもの場合

○ 手話ができるからと言って自動的に日本語の読み書きができるようになるわけではない。

→ 丁寧で継続的な日本語の指導が必要！

○ ただし、手話の力を日本語の指導に活かすことは可能である。

日本語が第一言語の聞こえない子どもの場合

○ 日本語が第一言語の聞こえない子どもに対して、手話を習得できる場が必要。

→ 通常学級では手話の習得は困難！

→ 手話に興味を持ってもらえるような取り組み。

聞こえない子どもたちの現状

- 聞こえない子どもたちの3分の2は普通学校で学ぶ。
 - 通常学級にいる聞こえない子どもは、音声言語環境の中で育つ。手話入力は無。
 - 難聴学級の多くは1人学級で他の聞こえない子どもとの接点は少ない。
- 手話に接する機会は限定される。
- ろう学校においても、高等部などインテの子どもの割合が多くなると音声メインのコミュニケーションになってしまう現状。

ろう学校高等部の危機

- 今まで

インテの生徒が高等部に入ってきてても、生え抜きの生徒の割合が多かったので、何とか手話を覚えて卒業する。

- 現在の状況

インテの生徒の割合が増えると音声が共通のコミュニケーションになってしまう。生え抜きの生徒が肩身の狭い思いをする。

→ ろう学校をもっとも必要とする生徒がろう学校にいろいろな環境になりつつある。

手話を第二言語として学べる場を
学校や社会がどのように作れるか

手話獲得と日本語獲得の 決定的な相違点

○ 日本語

- 例外的な場合を除き、親から子へ、子から孫へと言語が伝承されていく。

○ 手話

- 親から手話を学べる聞こえない子どもは10%。
- 多くの聞こえない子どもは親から手話を学べない！
 - 多くのろう者はろう学校の同級生や先輩とのかかわりの中で手話を自然に習得する。
 - 成人後、手話サークルやろう者コミュニティと出会い、そこから手話を学ぶ。

ろう学校以外の場で学んでいる子どもたちに、
手話のことを知ってもらい、手話を学ぶ場を社会が
意図的に作っていなければ、子どもが手話を学ぶ機会を逃してしまう。

聞こえない子どもたちに 手話環境を提供する様々な取り組み

- **学校**

「明晴学園」手話を第一言語として獲得するバイリンガル教育を行う私立学校。

- **行政、当事者団体、NPOが共同で手話環境を提供
大阪府乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」**

乳幼児期に聞こえない子どもが、ろう者スタッフと手話で関わる機会を保障し、保護者の手話学習機会を提供。


→ HPに活動が掲載されている。

- **NPO法人「つくし 聴覚・重複センター」**

愛知県にろう重複施設や放課後デイサービスを幅広く展開し、ろう者スタッフと子どもとが関わる機会を保障。

- **各地の聴覚障害者協会**

地域の当事者団体(ろう協)が、成人ろう者が聞こえない子どもと手話で関わる企画を様々な形で提供。



このような取り組みを経済的に
支援できるのは行政しかない。

まとめ

- 第一言語としても第二言語としても、手話を必要としている聞こえない子どもには、**手話環境を提供できる仕組み**を作る。
- 聞こえない子どもの多くは聞こえる両親のもとに生まれ、家庭内で手話を提供することは困難なので、**社会が支援**する必要がある。
- 子どもが手話を学べる場として、**全国各地に様々な先駆的な取り組み**があるので、それぞれの地域の資源を有効活用していく。
- **ろう学校**は聞こえない子どもが**最初に出会うろうコミュニティ**になるため、ろう学校との連携が不可欠。